読者のページ

調査季報を見ながら考える

金沢区役所　内海鉄弥

調査季報特集一覧を見ていると、読んでみたいと思う特集がいくつかあります。発行された時点では興味を持たなかったもの、忙がしくて読めないまま、どこかへいってしまったもの。

〃季報〃の性格上何か調べたい時、読みたい時、どこか一定の手近かな場所に保管してあっていつでも読める状態になっていると便利だと思います。特に区役所では仕事中、こうした出版物を、一般職員が読める時間的余裕はなく、回覧でまわってきても、せいぜい目次に目を通して、面白そうなものを一つ読む程度。こうした物を読んでいると暇で、ノンビリしているという一般的風潮があるようで、そくさと仕事にとりかかってしまいます。こうした公共出版物統計資料の目ぼしいものは、区役所等にも職員用の図書室を設けてもらい、一年に半日ぐらいでも図書室での研修日を与えてもらえれば、一般職員がより広い視野から物ごとを見ていけるようになると思います。多量の情報が出回っている割りには、その管理と伝達が民主的に行なわれていず、限られた情報しか選択出来ない一般職員の状態を考えてもらいたいと思います。

週刊紙から調査季報へ

環境事業局　飛山芳興

もう亡くなられたけれど、高等学校のとき世界史を教えていたSという先生がいた。その先生は以前大学で教鞭をとっていたとかで、授業の仕方も談論風発止るところを知らずといった趣であったが、風貌の方もいかにも自由な哲学者という感じだった。S先生にはいろんな意味で教えられることが多かったが卒業を控えてこんなことを言われた。

新聞や週刊誌はなくても別に構わないものだ。あんなものを読むと却って馬鹿になる。もっとしっかりまともな本を読め。高校・大学時代にはカントだヘーゲルだと言っていた奴が、社会に出ると文芸春秋になり、あげくの果は週刊誌やスポーツ新聞しか読まなくなる。君たちのうち少くとも半分はきっとそうなるな。

私は横浜市に入ってちょうど一〇年になるが、振り返ってみると、だいたいS先生のおっしゃった方向に進んできたかなと近頃しきりに反省している。五、六年たった頃に少し阿呆になったかなと思い始め、今ではもうちょっと取り返しがつかないのではないかと危惧している。しかし、それでも成果のほどはわからないけれど、気を取り直して机に向うこともあるので、その一つのきっかけがわれわれの同僚が調査季報に書く論文である。

そういう意味で、私は調査季報の良い読者ではないかと思っている。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで。（電話六七一―二〇二九）

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

〈あとがき〉

今回の取材では、直接会って話を聞いた人だけで、八〇余人にのぼり、電話で話を聞いた人も数えると百人を超している。その他にも、二つの市民団体の例会に参加させていただいたので、何人に会ったのだろうか。

横浜に住み、横浜で働いている人がみる「横浜」は、はたして〃国際都市〃なのかどうなのか。各々の人が、各々の基準で〃国際都市〃のイメージをもっていた。だから当然にも意見が違っている。それがまた現状だという気がした。何かの機会にまた語りたいと思う。

▽もう十年前になるが、大晦日のことが思い出される。クリスマスと大晦日は無料だという地下鉄を降りて、シャンゼリゼ通りに出た時は雪が降っていた。降りしきる雪の中に新年をつげる鐘の音が響きわたり始めると行き往う人々は抱き合い、〃ボナーネ、ボナーネ〃と喜び合った。ヨーロッパ人もアジア人もアフリカ人もそこにはいた。私は、キョトンとしてみた風景であった。これをパリの歴史と伝統だといってしまえばそれまでだが、今回「横浜の国際性」を担当してしきりに思い出されることであった。

その後、パリにも人種問題があることを知ったが、ニューヨークでもモスクワでも北京でも世界中から来ている人たちに会うことができた。横浜とは違う味をもったこれらの〃国際都市〃。もう一度、また世界の都市を回りたいと思う。

しかし今回、横浜で多くの外国人に出会うことができた。世界が横浜にあった。足もとを見つめて考えていかなければいけないと思った。

〈加藤〉